



Title	韓国語一型アクセントにおける アクセント単位の認定と特質
Author(s)	崔, 鉉鎭
Citation	研究論集, 15, 213(左)-252(左)
Issue Date	2016-01-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.15.l213
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60557
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_017_choi.pdf



韓国語一型アクセントにおける アクセント単位の認定と特質

崔 鉉 鎮

要 旨

本稿では、韓国語一型アクセントにおけるアクセント単位の認定と特質を明らかにするための第一歩として、一型アクセントとして報告されているチョンヤン（青陽）方言を対象に考察を行う。当方言は言い切り形と接続形の相違があり、言い切り形はAパターンとBパターンに分かれる。Aパターンは5音節以下で見られる音調型であり、Bパターンは一文節において6音節以上である上で、複数のアクセント単位に分かれた際に最終アクセント単位以外のアクセント単位に見られる音調である。Aパターンと相補分布を成している。当方言のアクセント単位は高い音調が1音節目あるいは1音節目と2音節目にある場合を1つのアクセント単位とし、高い音調が3音節目以降に現れるものは複数のアクセント単位からなるものと認定する。そうすることにより、当方言の一型アクセントが体系的に捉えられる。アクセント単位の認定に関わる要素には文節の長さや形態素の切れ目がある。この2つの要素の適用範囲と順序には相違が見られ、文節の長さは一次的に関わる要素として品詞や文節内部の構成と関係なく、文節の長さが6音節以上になれば必ず関与する。形態素の切れ目は文節の長さにより、アクセント単位が複数に分かれてはじめて関わるため、二次的要素といえ、アクセント単位の切れ目の位置に関わる。アクセント単位が複数に分かれた際に、最終アクセント単位以外のものはBパターンで現れる。Aパターンとは相補分布を成しているため、Aパターンの異形態と解釈できる。

0. はじめに

従来、韓国語諸方言のアクセント研究において一型アクセント方言はアクセント研究から外されてきた傾向にあったため、本格的なアクセント研究が殆ど行われてきていない。近年になってから一部の研究者により報告されてはいるものの、断片的な記述にとどまっている場合が多

い。そのため、韓国語一型アクセントの言語地理的な分布をはじめ、韓国語一型アクセント諸方言の間に見られる共通点と相違点など、未だに明らかにされていない部分が多いのが現状である。

アクセントの音韻的解釈やアクセント体系を構築するためには、アクセント単位の認定と特質を明らかにする必要がある。このような研究はアクセントの対立を持つ方言のみならず、アクセントの対立を持たない一型アクセントを対象にも行われるべきであると考えられる。にもかかわらず、韓国語諸方言を対象にアクセント単位の認定と特質に考察を行った先行研究には李 (2005)¹ しか見当たらず、韓国語一型アクセントを対象にアクセント単位の認定と特質について考察した先行研究は管見の限り、全く見当たらない。

従って、本稿では、上記のような状況を踏まえつつ、韓国語一型アクセントのアクセント単位の認定と特質を明らかにするための第一歩として、チョンヤン方言を対象に考察を行う。チョンヤン方言は崔 (2012) により一型アクセントとして報告されている。

1. 一型アクセントの概念と定義

韓国語一型アクセントにおけるアクセント単位の認定と特質について考察を行う前に、本稿において重要な概念である一型アクセントについて取り上げた上で、筆者による韓国語一型アクセントの定義を行っておく。

1.1. 一型アクセントという用語及び定義

「一型アクセント」という用語は、平山輝男氏により始めて用いられ²、その後、多くの学者らにより広く用いられてきている。一型アクセントの定義及び概念を捉えるには、「無アクセント」という概念が密接に関わる。両者はアクセントによる対立を持たない点において共通しているが、学者の間では両者を異なる概念として捉える立場と同じ概念として捉える立場に分かれる。一型アクセントの定義はどちらの立場から捉えるかによって変わってくる。

¹ 李 (2005) はテグ (大邱) 方言を対象に「疑問詞＋用言疑問形」、「副詞＋用言疑問形」、「名詞＋動詞」、「名詞＋名詞」といった文と句に見られるアクセントを分析し、これらをアクセントの面から結合型、並列型、接合型の3つに分類した上で、アクセント体系を立てる際には1つのアクセント単位からなる結合型のみに基づくべきであると主張している。

² 平山 (1944) には、「一型アクセント」という用語を用いるようになった経緯について述べられている。1935年の秋、音声学協会での講演の中で、アクセントによる区別がないものを「一型アクセント」を「一ツ型 (ひとつかた) アクセント」或いは「一型 (いっけい) アクセント」と名付け、説明していたところ、その夜の晩餐会で三宅武郎氏の助言を受け、一型アクセントと名付けたことにしたという。

一型アクセントと無アクセントを異なる概念として捉える立場には平山（1974, 1975）³ と上野（1984, 1999, 2009, 2011）が代表的である。それに対し、両者を同じ概念として捉える立場には山口（1998）が代表的である。

1.1.1. 一型アクセントと無アクセントを異なる概念として捉える立場

平山（1974, 1975）と上野（1984, 1999, 2009, 2011）がある。お互いに異なる分類基準を設定しているが、明確な分類基準に基づき、一型アクセントと無アクセントの分類を行っている。

平山（1974, 1975）は、「型知覚」を基準として立て、両者を分類している。型知覚とは「方言の話し手が語や文節などを一定の高低関係の相に発音しようとする意識（『国語大辞典』p 17）」のことを意味するが、平山（1974, 1975）は同じく一つの音調型を持っていても「型知覚」を持つ場合の方言のみを一型アクセントとして捉え、型知覚を持たない場合は無アクセントとして捉える。例えば、都城市方言の場合は、文節において文節末のみ高くなる尻上がり一型であるが、アクセント型が明瞭であり、方言話者も型知覚を持つ。それに対し、無アクセントの場合は、アクセント型が明瞭ではなく、方言話者自身も型知覚を持たないという。通時的観点から一型アクセントと無アクセントを捉えた場合、一型アクセントは鹿児島二型アクセントが統合した結果によるものであると捉え、「統合一型アクセント」と名付けている一方で、無アクセントはアクセントの崩壊によるものと捉え、「崩壊アクセント」と名付けている。両者の分布については、一型アクセントは、ごく狭い地域に分布しているが、崩壊アクセントはかなり広い領域に観察され、宮崎市・熊本市をはじめ、四国の大洲市、北陸の福井市、関東の水戸市・宇都宮市、奥羽の福島市・仙台市・山形市など全国にわたって分布しているという。

一方、上野（1984, 1999, 2009, 2011）は、一型アクセントを「N 型アクセント」⁴ として捉えた立場から無アクセントとの分類を行っている。但し、分類基準の設定においては上野（1984, 1999）、上野（2009, 2011）に相違が見られる。

上野（1984, 1999）は「文節表示機能」を分類基準として設定している。例えば、上野（1984）は一型アクセントと解釈する都城市方言⁵ の場合、「文節性」が保たれ、音調が文節表示機能を

³ 最初から一型アクセントと無アクセントを異なる概念として捉える立場ではなく、平山（1936, 1940, 1944, 1955, 1957）では、両者の相違を認めつつも、同じ概念として捉えていたが、平山（1974, 1975）から両者を異なるものとして捉える立場に取り直している。

⁴ N 型アクセントとは、「アクセント単位の長さが増えても、対立数が一定数（N）以上に増えていかない体系」（上野, 2012, p 44）である。上野（1984）により初めて提唱された概念であり、「アクセント単位の長さに応じて対立数が増えていく体系（上野, 2012, p 45）」である「多型アクセント」と対立される概念である。

⁵ 文節の最後の音節が常に高い特徴を持つ。（Uwano, 1999）

例）[テ（手） ヤ [マ（山） オト [コ（男） ヤマミ [チ（山道） ヤマノボ [リ（山登り）

果たしているのに対し、無アクセントと解釈する仙台市⁶方言の音調は既に文節から離れ、「句表示機能」のみを持つことが窺えるという。但し、都城市方言もノや連体形による連体修飾語は次に来る名詞と1つのアクセント単位を成す傾向が強く、文節から離れ始めていることが窺える現象が見られるという。上野（1999）は上野（1984）と同様、都城方言と仙台方言を例としてあげているが、具体例を提示している。2文節からなる同じ文において都城方言の音調型は文節ごとに音調特徴が現れるため、文節表示機能を果たしていると捉えるが、仙台方言の音調型はそうではないため、文節表示機能を果たしていないと捉えている。

「Compare the example of sentence in both dialect

Miyakonojo	Sendai
{kag[ga nat[ta]}	{ka[gi]nga}{[nat]ta} (Persimmons have grown.)
*{kagga nat[ta]}	{ka[ginga nat]ta}

As can be seen from these examples, the pitch pattern in the Miyakonojo dialect marks the end of the syntagma. This shows that in a one-pattern accent system, accent has a demarcative function. The Sendai dialect, on the other hand, does not have this function.

（都城方言の音調型は文節末であることを示す。これは一型アクセントにおける音調型は文節表示機能（demarcative function）を持つことを意味する。一方で、仙台方言の音調型はそのような機能を持たない。）Uwano（1998）p 186

上野（2009, 2011）はアクセント単位において固有のパターンの有無を基準に一型アクセントと無アクセントを分類している。アクセント単位は単語であるか、文節であるかといった言語と方言により、多少の出入りはあるものの、アクセント単位で固有のパターンを持つ場合のみを一型アクセントと捉え、それより大きな単位、例えば、音調句で初めてパターンが決まる場合は無アクセントと捉える。

1.1.2. 一型アクセントと無アクセントを同じ概念として捉える立場

山口（1998）が代表的である。山口（1998）は音韻論的な面において一型アクセントと無アクセント両者とも現れる音調は非弁別的であるため、両者を同じものとして捉えている。例えば、一型アクセントの典型的な方言としてよく取り上げられる都城市方言の尾高一型について

⁶ 句において語頭音節と最後の音節は低くそれ以外の音節は若干高い特徴を持つ。（Uwano, 1999）。
例）[ハ] ナ（鼻、花） ハ [ナ] ダ コ [ノハ] ナ コ [ノハナ] ダ コ [ノハナガソウ] ダ

「無アクセントとされる方言も一定のパターンを持ち、音韻的に両者とも型の区別がない、下降があるとしてもその下降には音韻的意味がない、上昇があったとしてもその上昇に音韻的意味がないことがポイントであり、その相違はイントネーションレベルのものであるのに他ならず、一型と無型を機別する意味自体音韻的に無意味である (p 58)」と指摘している。

1.3. 「準声調方言」と「非声調方言」

韓国では、声調論による研究が盛んに行われてきているため、一型アクセントという概念は存在しない。但し、一型アクセントと似た概念として Gim, Chagyun (1999) の準声調方言と非声調方言がある。Gim, Chagyun (1999) は韓国語諸方言を超分節音素から分類した Gim, Yeongman (1986)⁷ に基づきつつ、声調論による分類を試み、韓国語諸方言を声調方言、準声調方言、非声調方言の3つに分類している。

まず、声調方言は語や文節の高低が相対的に固定した上で、他の音声学要素により予測不可能であるものとして、キョンサン (慶尚) 道、カンウォン (江原) 道の東部、ハムギョン (咸鏡) 道、延辺が属すると述べている。次に、準声調方言は、音の高低と母音の長短が引き分けとなっている状態のものである。そのため、母音の長短の観点から見れば高低と強勢が予測可能であり、高低の観点から見れば母音の長短と強勢が予測可能である。クァンジュ (光州) とチョル (全羅) 南道の一部が属している。最後に、非声調方言は、語や文節の高低が他の音声学要素により予測可能であるものとして、ピョンアン (平安) 道、ファンヘ (黄海) 道、キョンギ (京畿) 道、ソウル、カンウォンド (江原) 道の西部、チュンチョン (忠清) 道、チョルラ (全羅) 北道、チョルラ (全羅) 南道の一部が属すると述べている。

アクセント論から捉えた場合、声調方言は多型アクセントとN型アクセントに似た概念として解釈できる。一方、非声調方言と準声調方言は一型アクセントに似た概念として解釈できる。非声調方言の場合は音声的に複数の音調型が現れても音声的な要素により予測可能であるた

⁷ Gim, yeongman (1986) は長短と高低を超分節音素として設け、韓国語諸方言の分類を以下のように行っている。

- ①西部諸方言 (ピョンアン (平安), ファンヘ (黄海), キョンギ (京畿), ソウル, カンウォン (江原) 西部, チュンチョン (忠清), チョルラ (全羅))
- ②キョンナム (慶南) 方言 (ウルサン (蔚山), ウルチュ (蔚州), コチャン (居昌) などの北部地方は除く。)
- ③キョンブク (慶北) 方言 (キョンナム (慶南) のウルサン (蔚山)・ウルチュ (蔚州), ・コチャン (居昌), カンウォン道のサムチョク (三陟) を含む。)
- ④ハムキョン (咸鏡) 方言 (カンウォン (江原) 道の北東部を含む)

①の西部諸方言は長短のみが弁別的な方言であり、②のキョンナム方言と④のハムキョン方言は高低のみが弁別的な方言である。一方、③のキョンブク方言は長短と高低両者とも弁別的な方言である。

め、当然、一型アクセントと似た概念として捉えられる。準声調方言の場合は、母音の長短と音の高低のどちらが弁別的要素であるか決めたいが、本稿では母音の長短を音素として捉えているため、非声調方言と同じく音声的要素により音調型の出現条件が予測可能であるものと見る。よって、非声調方言と共に一型アクセントと似た概念として捉えられる。

1.4. 筆者による「韓国語一型アクセント」の定義

日本語の先行研究においては一型アクセントを無アクセントと同じ概念として認めるか否かにより、一型アクセントの定義が大きく変わるといえる。筆者はこのような先行研究を踏まえつつ、韓国語諸方言において「文節や句において音声的に複数の音調型が現れても音韻的な対立を成していないもの」を全て「韓国語一型アクセント」として捉える立場から論を進める。

2. 表記⁸

音素表記についてローマ字表記に基づき、子音は/b, p, pp, d, t, tt, g, k, kk, j, ch, jj, s, ss, m, n, ng, r, h/を、母音は/a, ae, i, o, eo, u, eu/を、そして半母音は/y, w/を用いる。

音調表記に関しては、音調の上昇は「[」で、音調の下降は「]」で示し、下降調 (Falling tone) は「]]」で示す。◎は助詞と活用語尾を示す。また、「.」は音節間の境界を示し、「|」はアクセント単位の切れ目を示す。「。」は言い切り形を示し、「—」は形態素の切れ目を示す。

3. チョンヤン方言のアクセント特徴

当方言は言い切り場合と言い続ける場合とで異なる音調型が現れる。便宜上、前者を言い切り形、後者を接続形と呼ぶ⁹。

言い切り形は A パターンと B パターンに分けられる。A パターンは、1 音節は下降調、2 音節は 1 音節目のみ高い音調型、3 音節からは 1 音節目と 2 音節目が高い音調型で現れる。但し、語頭子音が無声有気音 (/p, t, k, ch/)、声門閉鎖を伴う無声無気音 (/pp, tt, kk, ss, jj/)、無声歯茎摩擦音 (/s/)、無声声門摩擦音 (/h/) である場合は 3 音節以下では 1 音節目のみ高い

⁸ インフォーマントは当方言の生え抜き話者である発表者 (1987 年生まれ) である。

⁹ 言い切り形と接続形という用語は上野 (1977) によるものである。従来、韓国語諸方言のアクセントに関する先行研究において言い切る場合と言い続ける場合とで異なる音調型が見られる場合、「言い切り形」と「接続形」に倣い、記述している。本稿でも、便宜上、言い切り形と接続形をそのまま用いることにする。しかし、上野 (1977) の言い切り形と接続形という概念を韓国語諸方言の解釈にそのまま導入することに関しては検討の余地がある。言い切り形と接続形の区別を持つ岩手県雫石 (し

音調型で現れる場合もある。便宜上、これらの子音を強子音と呼び、強子音以外のものは弱子音と呼ぶ¹⁰。一方、Bパターンは、語頭子音の種類に関わらず、高く平らな音調型で現れる。Bパターンは一文節において長さが6音節以上であり、複数のアクセント単位に分かれた際に、最終アクセント単位以外のアクセント単位にのみ現れる¹¹。Aパターンとは相補分布を成している。以下の表1に言い切り形におけるチョンヤン方言の音調型を示す。

表1 チョンヤン方言の音調型

		1	2	3	4	5
A	弱子音	[○]	[○]○	[○○]○	[○○]○○	[○○]○○○
	強子音			[○○]○～[○]○○		
B	—	[○]	[○○]	[○○○]	[○○○○]	[○○○○○]

一方、接続形は高く平らな音調型で現れる。Bパターンと同じ音調型であるが、現れる環境と条件が異なるため、両者を異なるものと捉える。両者の相違については、4.5節で詳しく述べる。

4. 韓国語一型アクセントにおけるアクセント単位の認定の必要性及び認定基準

4.1. アクセント単位の定義

上野 (2011) はアクセント単位について、「アクセント (ないしアクセント素) を担う単位で、

ずくいし) 方言に対し、上野 (1989) は「言い切りでは核のある所だけが「高」、接続ではその核からそれを含む文節末までが「高」、という関係にある。(省略) この非句末における「高」の延長は文節を超えては行われない。(p 192)」と述べている。この記述から上野 (1977) の言い切り形と接続形は文節を単位とする概念であることが読み取れる。しかし、チョンヤン方言は、文節だけでなく、句を単位として現れる場合も観察されるなど、本来の言い切り形と接続形の概念に当てはまらない特徴が見られる。この問題について今後検討していきたい。

¹⁰ 強子音と弱子音と言う用語は Gim, Chagyun (1980) によるものである。

¹¹ これと似た現象がアクセント型の対立を持つキョンサン道方言にも見られる。但し、キョンサン道方言の場合は複数の形態素からなる複合語にのみ見られる。福井 (1999) はチャンニョン (昌寧) 方言の複合語において1つの文節を成しているに関わらず、複数のアクセント単位を成してももの(アクセント結合規則)の中で、han(H)+ga.un.de(LHL)→han.ga.un.de HHHH(真ん中)のように「高」に挟まっている「低」が「高」に変化する現象が見られ、この現象を音調の平準化と解釈している。一方、李 (2005) はテグ方言の複合名詞において前部要素が1音節無核型で、後部要素が低く始まる有核アクセントで構成されている場合、形態素の境界である後部要素の語頭の音調が「低→高」に引き上げられる音声的交替が起こると報告している。例えば、mur([○]無核, 水)+dang.beon(○[○], 当番)→mur-dang.beon(○ | ○○)(水当番)などが挙げられている。キョンサン道方言に見られる上記のような現象と当方言のBパターンとで何らかの関連性や共通点があるかについて今後、検討していきたい。

これによってアクセントの型が決まる。この単位未満のものはそれ自身のアクセントを担うことができない。アクセント体系は、この長さが同じものの間での対立数と、長さが増えるに従って対立数がどのようになるかによって決まる（『音声基本辞典』p 320）」と定義している。そして、アクセント単位の長さについては「日本語東京方言の場合、「蚊、手」のような短いものから、「東京オリンピック、オックスフォード大学、働かされ始める」などのように長いものまであり、1つの単位の長さの上限は決まっていないと述べている。

4.2. アクセント単位認定の必要性の検討

李（2005）はアクセント単位の認定についてアクセント体系を構築する上で欠かすことのできないものとし、アクセント型の対立を持つ韓国語テグ（大邱）方言を対象に考察を行っている。アクセント体系を正確に捉えるためにはアクセント単位の認定は必須不可欠なものであることが窺える。一型アクセントにおいても例外ではない。一型アクセントはアクセント型の対立を持たないため、アクセント体系の構築は行われない。しかし、現れる音調型の全てを1つのアクセント単位と認定し分析と解釈を行うと、同じ音節数において複数の音調型やこれまでとは異なる音調型が現れた場合、全て表1に加えなければならない。そうすると、全体的に非常に複雑な音調的特徴になってしまい、一型アクセントが体系的に捉えられなくなる。

例えば、チョンヤン方言の場合は、4.3節の表1に示したように、言い切り形はAパターンとBパターンに分かれる。両者は言い切り形という同じ環境に置かれているが、Bパターンは一文節において長さが6音節以上であり、複数のアクセント単位に分かれた際に最終アクセント単位以外のアクセント単位にのみ現れる。Aパターンと相補分布を成している。以下に代表例として語+助詞からなる場合の音調型を示し説明すると、5音節以下までは、高い音調が1音節目あるいは1音節目と2音節目に現れるが、6音節以上では、高い音調が3音節目以降に現れることが分かる。

- | | | | | |
|---------------|---------|-----------|---------------|-------------------|
| (1) | 単独形 | -i/ga(-が) | -bo.da(-より) | -bo.da.neun(-よりは) |
| ① ho.rang.i | [○○]○～ | [○○]○○。 | [○○]○○○○。 | [○○○] ◎◎]◎。 |
| (虎) | [○]○○。 | | | |
| ② ho.ru.ra.gi | [○○]○○。 | [○○]○○○○。 | [○○○○] ◎]◎。 | [○○○○] ◎◎]◎。 |
| (ホイッスル) | | | | |

助詞の後接により、文節の長さに変化はあるものの、語と助詞からなる構造の言い切り形である点においては共通している。そのため、5音節以下で現れる音調型と6音節以上で現れる音調型を1つのアクセント単位と解釈しがちである。しかし、仮に6音節以上の音調型を1つ

のアクセント単位と捉えてしまうと、文節が長くなっていくにつれ、音調型の数も増えていくため、その都度、それぞれの音調型が現れる条件と環境について説明する必要性が出てくる。当然、当方言の一型アクセントが体系的に捉えられないという問題が生じてしまう。

しかし、一文節において6音節以上で現れる音調型を複数のアクセント単位からなるものと認定し、最終のアクセント単位はAパターン、それ以外のアクセント単位はBパターンで現れると解釈すれば、どのような音調型が現れても、表1に収まることになり、上記のような問題が解決できる。

4.3. 先行研究

チョンヤン方言を対象にアクセント単位の認定と特質について考察した本格的な研究はない。しかし、チョンヤン方言のアクセントについて詳しく取り上げた崔(2012)では、文節全体が6音節以上になると、高く音調が3音節目以降には現れると報告している。この音調型についてアクセント単位という観点から分析している。アクセント単位の認定基準について明確に述べていないが、複数のアクセント単位に分かれるものと解釈している。崔(2012)の記述と解釈を詳しく見てみれば、チョンヤン方言は文節の長さが6音節以上になると、複数のアクセント単位に分かれるが、この現象は音節数の制約によるものと捉えている。名詞と助詞からなる場合を例として挙げれば¹²、音節数の制約は文節全体だけではなく、助詞に対しても適用される。助詞に対する音節数の制約は文節全体が6音節以上になってはじめて働き、複数のアクセント単位に分かれていても、助詞の音節数により、助詞のアクセント単位が完全に独立して現れるか否かが決まる。助詞の音節数が4音節以上であれば、助詞のアクセント単位は完全に独立して現れるが、3音節以下であれば、助詞のアクセント単位は完全に独立せずに、語と助詞を境界に語は高く現れ、助詞は低く現れる。複数のアクセント単位に分かれた際に語は全て高い音調で現れるが、助詞に接続していると捉え、接続形として解釈している。

¹² 用言にも同じ現象が見られ、文節の長さが6音節数以上になると、複数のアクセント単位に分かれる。但し、文節の長さが同じであっても-da からなる用言と-ha.da(-する)からなる用言とで異なる音調型が現れ、-da からなる用言は高い音調が3つ続く音調型で現れるのに対し、-ha.da 用言は高い音調が4つ続く音調型で現れると記述している。文節の長さが6音節以上になり、複数のアクセント単位に分かれている場合、活用語尾の音節数により、活用語尾が完全に独立したアクセント単位を成すか否かが決まる。活用語尾が4音節以上であれば、完全に独立したアクセント単位を成し、3音節以下であれば、活用語尾は低く現れるという。全ての音調が高く現れる語幹の音調型については活用語尾に対し、接続した関係にあると捉え、接続形として解釈している。

(2) 語+助詞からなる場合の音調型 (崔 2012 を再整理)

	-bo.da(-より)	-bo.da.neun(-よりは)	-e.seo.bo.da(-でより)
① a.i(子供)	[○○]◎◎。	[○○]◎◎◎。	[○○ ◎◎]◎◎。
② gor.jja.gi(谷)	[○○]◎◎◎。	[○○○] ◎◎◎。	[○○○ ◎◎]◎◎。
③ nang.tteo.reo.ji (崖)	[○○○○] ◎◎。	[○○○○] ◎◎◎。	[○○○○ ◎◎]◎◎。

上記の解釈に対し、筆者は2つの点を指摘した上で、解釈し直す。

1つ目は、助詞の音調型に対する解釈である。崔(2012)では、助詞に対しても音節数の制約があり、複数のアクセント単位に分かれても助詞の音節数により、完全に独立したアクセント単位を成す場合とそうではない場合とに分かれると分析している。具体的に説明すれば、4音節を境界に4音節以上であれば、表1のAパターンに示した音調型で現れ、4音節未満であれば、助詞は全て低い音調型で現れると捉えている。しかし、これはあくまでも語の音調型に対する相対的なものである。助詞が3音節以下の場合において助詞だけの音調型を観察すれば、顕著な下降は見られないが、表1のAパターンに示した音調型に沿って下降が現れるため、助詞に対する音節数の制約は余分な条件であるといえる。

2つ目は、Bパターンに対する解釈である。崔(2012)では、語が助詞に対し、接続した関係にあるものと捉え、接続形として解釈している。しかし、接続形とBパターンは全く異なる環境と条件で現れる。接続形は言い続けるかどうかといった話者の意図により現れる環境が決まる。お互いに関係のない名詞を並べる際に現れやすい。それに対し、Bパターンは一文節において文節の長さという制約により、アクセント単位が複数に分かれた際に最終アクセント単位以外のものにのみ現れる。Aパターンと相補分布をなしているため、Aパターンの異形態であると言える。Bパターンと接続形の相違については4.5節で詳しく取り上げる。

4.4. アクセント単位の認定に関わる要素

当方言はアクセント単位の認定において文節の長さや形態素の切れ目が関わる。しかし、2つの要素がそれぞれ関与する条件とその順序に相違が見られる。文節の長さはアクセント単位の認定において一次的に関わる要素として品詞や文節内部の構成と関わることなく文節の長さが6音節以上になれば必ず関与する。アクセント単位が複数に分かれた際には、形態素の切れ目が関わる。

4.4.1. 文節の長さ

この要素は当方言のアクセント単位の認定において一次的に関わる。当方言にはアクセント単位の長さや上限が決まっており、1つのアクセント単位にまとまる音節数は5音節までである。6音節以上になると、アクセント単位の切れ目が生じる。実質的に1つのアクセント単位

にまとまる文節の長さは5音節までである。文節の長さの上限は品詞や文節内部の構成などとは関係なく、全体の音節数が6音節以上であれば、必ず関わる。例を示し方に関しては、()内の数は助詞の音節数を示し、それ以外は名詞の音節数を示す、+は形態素の切れ目を示す。

(3) 名詞+助詞からなる場合

- ① 1+(2+2+1) tteur-e.seo-bo.da-neun (庭でよりは) [○○○○] | ○○○○。
- ② 2+(2+2) seo.ur-e.seo-bo.da (ソウルでより) [○○○○○] | ○○○○。
- ③ 3+(2+1) chung.cheong.do-e.seo-neun (忠清道では) [○○○○] | ○○○○。
- ④ 4+(2) heo.su.a.bi-bo.da (案山子より) [○○○○○] | ○○○○。

(4) 複数の名詞からなる複合名詞の場合

- ① 2+4 gae.ran-ar.rae.reu.gi (卵アレルギー) [○○ | ○○○]○○。
- ② 3+3 chung.cheong.do-sa.tu.ri (忠清道方言) [○○○○] | ○○○○。
- ③ 4+2 ho.ru.ra.gi-so.ri (ホイッスルの音) [○○○○○] | ○○○○。

(5) 用言の場合

- ① du.deu.ri-sib-ni.da ((尊敬の意味としての) 叩かれます) [○○○○] | ○○○○。
- ② yu.myeong-ha-sib-ni.da (有名でいらっっしゃいます) [○○ | ○○○]○○○。

例(3)は名詞に助詞が後続している場合であり、例(4)は名詞どうしが結合した複合名詞の場合である。そして、例(5)は動詞語幹に活用語尾が付いている場合である。お互いに異なる構造を成しているが、いずれの例でも文節の長さが6音節であるため、アクセント単位の切れ目が生じていることが分かる。

音調的特徴を見ると、最終アクセント単位以外のものはBパターンで現れる。一方、後部の音調型について見れば、前部の音節型に比べ、全て低く現れるが、後部の音調型のみを観察すれば、2音節は1音節目から2音節目にかけて再び低くなり、3音節以上の場合は2音節目から3音節目にかけて再び低くなるため、表1のAパターンに示された音調型に沿って現れると解釈できる。

4.4.2. 形態素の切れ目

形態素の切れ目はアクセント単位の切れ目が生じてはじめて関わる要素として、アクセント単位の切れ目の位置に関与する。先ず、例(3)の名詞+助詞からなる場合、1音節語と2音節語は助詞と助詞の間にアクセント単位の切れ目が生じており、3音節語と4音節語は語と助詞の境界にアクセント単位の切れ目が生じている。次に、例(4)の複合名詞の場合は前部要素と後部要素の間にアクセント単位の切れ目が生じている。例(4)の用言の場合は、基本形において名詞+ha.da(-する)からなる用言とそうではない用言とでアクセント単位の切れ目の位置が異なる。yu.myong-ha-da(有名だ)を基本形で持つ例(5)②の場合は名詞と-ha.daを含む活用語尾の間にアクセント単位の切れ目が生じるが、du.deu.ri-da(叩く)を基本形で持つ例(5)①は語根を境界にアクセント単位の切れ目が生じる。しかし、内部構造は異なるものの、どのような場合でも形態素の切れ目にアクセント単位の切れ目の位置が置かれることが分かる。

一方、3つ以上の形態素からなる複合名詞の場合、形態素の数と各形態素の音節数が同じであっても、それぞれの形態素が意味的にどの形態素と強く結合しているかにより、形態素の切れ目の位置が異なる場合がある。以下の例は3つの形態素からなる複合名詞に助詞が後続する場合である。

- (6) $((2+1)+1)+2$ dang.nyō - byēong - yag - bo.da (糖尿病の薬より)
 ((糖尿+病)+薬)+より
 [○○○] | ○○○]◎。

- (7) $(2+(1+1))+2$ saeng.seon-nun-ar-bo.da (魚の目玉より)
 (魚+(目+玉))-より
 [○○ | ○○]◎◎。

上記の例(6)と例(7)は4つの形態素からなる複合名詞であるが、文節の長さが6音節であるため、アクセント単位の切れ目が生じている。形態素の数をはじめ、各形態素の音節数と配置が全く同じであるにも関わらず、アクセント単位の切れ目の位置が異なる。これは既に述べたように、形態素の数が3つ以上になると、形態素間の意味的な結合度に差が生じるからである。例(6)の場合、第2形態素の byēong(病)が第3形態素の yag(薬)より第1形態素の dang.nyō(糖尿)と意味的に強く結合している左枝分かれ構造である。それに対し、例(7)の場合は、第2形態素の nun(目)が第1形態素の saeng.seon(魚)より第3形態素の ar(玉)と意味的に強く結合している右枝分かれ構造である。つまり、このような形態素間の意味的結合度の違いがアクセント単位の切れ目の位置に影響を与え、お互いに異なる音調型で現れるのである。

以下の例は上記の例と同様、形態素の数と各形態素の音節数が同じであるが、各形態素がど

の形態素と意味的に強く結合しているかによりアクセント単位の切れ目の位置が異なるものである。

- (8) ① $((2+1)+2)+1$ go.mu-jur-nor.i-ga (ゴムバンドを用いた遊び)
 ((ゴム+紐)+遊び)+が
 [○○○] | ○○]◎。

- ② $(2+(1+2))+1$ naem.bi-seon-jab.i-ga (鍋の取っ手-が)
 (鍋+(手+取り))+が
 [○○ | ○○]○○。

- (9) ① $(3+(1+2))$ beon.de.gi-tong.jo.rim (蛹の缶詰)
 (蛹+(缶+煮詰め))
 [○○○] | ○○]○。

- ② $((3+1)+2)$ ba.na.na-mas-u.yu (バナナ味の牛乳)
 ((バナナ+味)+牛乳)
 [○○○○] | ○]○。

4.5. 言い切り形の B パターンと接続形の相違

当方言は一文節において 6 音節以上かつ、複数のアクセント単位に分かれた際に、最終アクセント単位以外のものは全て B パターンで現れると述べた。音調の現れ方からすれば、接続形と同じ特徴を持つが、接続形とは現れる環境と条件が異なる。両者の相違をより明らかにするためには「接続形」という概念について検討する必要がある。接続形という概念は言い切り形と共に上野 (1977) により初めて提唱されたものである。接続形について詳しく述べている上野 (1993) を見れば、「その後はまだ続けるつもりで発音したときの形 (p 51)」として定義されており、普通は実際に後に語句が続くわけであるため、後に続けるつもり (態勢) で発音するが、実際には後を続けないでやめることも可能であり、その場合にも接続形で現れると述べている。

上記の内容から接続形が現れる条件と環境は話者の意図が最も重要な要素として働くことが分かる。接続形が現れやすい代表的な例の一つは互いに意味的につながりのない名詞が複数並んでいる場合である。以下の例(10)は当方言において複数の名詞が並んでいる場合を言い切り形と接続形でそれぞれ表したものである。{ } は句の切れ目を示す。

(10) 複数の名詞が並んでいる際の音調型

so (牛), ho.rang.i (虎), to.kki (兎), doe.ji (豚)

a. 言い切り形: { [○] } | { [○○]○ } | { [○]○ } | { [○]○ }。

b. 接 続 形: ① { [○] } | { [○○○] } | { [○○] } | { [○○] }

② so(牛), ho.rang.i(虎), to.kki(兎), doe.ji-da(豚-だ)

{ [○] | [○○○] | [○○] | [○○]◎ }。

(10)a と b ①はそれぞれの名詞が1つのアクセント単位を成す同時に1句を成している。それに対し、(10)b ②は複数のアクセント単位からなっているが、1句であるため、最終アクセント単位の doe.ji-da (豚-だ)のみ言い切り形で現れ、他のものは最終アクセント単位に対し、接続された環境に置かれるため、高く平らな音調型で現れる。言い切り形と接続形は同じ環境に置かれても話者の意図により、どちらでも現れうる。ポーズという観点から捉えれば、意味的に関連性のない複数の文節が並んでいるため、文節の間にポーズが入りやすいという特徴を見られる。

それに対し、Bパターンは1つの文節を成している場合にのみ現れる。6音節以上という文節の長さの上限により、アクセント単位が複数に分かれた際に最終アクセント単位以外のアクセント単位に現れる。ポーズの観点から捉えた場合、アクセント単位は複数に分かれていても1つの文節であるため、アクセント単位の切れ目の位置にポーズは入りにくい。

以上の内容をまとめてみると、接続形が現れる環境と条件は話者の意図により決定されるが、Bパターンは6音節以上かつアクセント単位が複数に分かれている場合という特定の条件により決定される。そのため、Bパターンは接続形とは異なる性質のものであるといえる。Aパターンとは相補分布を成しているため、Aパターンの異形態として解釈できる。

5. まとめ

以上、韓国語一型アクセントとして報告しているチョンヤン方言のアクセント単位の認定と特質について考察を行った。

当方言のアクセント単位の認定において、高い音調が1音節目あるいは1音節目と2音節目にある場合を1つのアクセント単位とし、高い音調が3音節目以降に現れるものはアクセント単位の切れ目が生じたものと認定することにより、どのような音調型でも表1に収まり、当方言の一型アクセントの特徴が体系的に捉えられる。アクセント単位の認定に関わる要素として

は文節の長さや形態素の切れ目が関わる。この2つの要素は適用範囲と順序に相違が見られる。文節の長さは一次的に関わる要素として品詞や文節内部の構成と関係なく、文節の長さが6音節以上になれば必ず関与する。形態素の切れ目は文節の長さにより、アクセント単位が複数に分かれてはじめて関わるため、二次的要素と言え、アクセント単位の切れ目の位置に関与する。但し、3つの形態素からなる複合名詞の場合、形態素の数、各形態素の音節数といった条件が全て同じであっても意味的に右枝分かれ構造を成すか、左枝分かれ構造を成すかにより、アクセント単位の切れ目の位置が変わる場合がある。

アクセント単位の切れ目が生じた際に、最終アクセント単位以外のものはBパターンで現れる。Bパターンは、話者の意図により言い切り形と自由交替できる接続形とは違い、一文節において6音節以上かつ、複数のアクセント単位に分かれた際に、最終アクセント単位以外のアクセント単位のみには現れるため、Aパターンの異形態と解釈できる。

(ちえ ひょんじん・言語文学専攻)

参考文献

- 李連珠(2005)「韓国語大邱方言におけるアクセント単位の認定基準」日本言語学会 第131回大会 予稿集 pp.78-83
- 上野善道(1984)「N型アクセントの一般特性」『現代方言学の課題』平山輝男博士古稀記念会(編)第2巻記述的研究篇 明治書院 pp.167-209
- 上野善道(1993)「日本語の方言アクセントとイントネーション」『国際化する日本語話し言葉の科学と音声教育』第7回大学と科学公開シンポジウム組織委員会編,クバプロ pp.44-66
- Uwano, Zendo (1999)「Classification of Japanese Accent Systems」Proceedings of the Symposium “Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena, Tonogenesisism, Typology, and Related Topics” pp. 151-186
- 上野善道(2009)「服部音韻論の再評価」『東京大学言語学論集』第28号
- 上野善道(2011)「N型アクセントは何か」N型アクセントの原理と成立 公開シンポジウム レジュメ
- 上野善道(2012)「N型アクセントとは何か」『音声研究』第16巻第1号 pp.44-62
- Gim, Yeongman (1986)「国語超分節音素の史的研究」高麗大学校大学院 国語国文学科博士学位論文
- Gim, Chagyun (1980)『慶尚道方言の声調体系 (경상도 방언의 성조체계)』科学社
- Gim, Chagyun (1999)『ウリマル方言の声調の比較 (우리말 방언 성조의 비교)』亦樂
- 佐藤亮一(1980)「一型アクセント」『国語学大辞典』株式会社理想社 pp.27-28
- 崔鉉鎮(2012)「韓国語一型アクセントに関する研究——忠清道青陽方言を中心に——」北海道大学大学院文学研究科研究論文 第12号 pp.303-319
- 平山輝男(1936)「南九州アクセントの研究(二)」『方言』第6巻 5号 春陽堂刊 pp.50-63
- 平山輝男(1940)『全日本アクセントの諸相』育英書院
- 平山輝男(1944)「日本語アクセントの統合——特に一型アクセントと曖昧アクセントを中心として——」『橋本博士還暦記念 国語学論集』岩波書店 pp.155-182

平山輝男 (1955) 『九州方言音調の研究』 学界之指針社 pp.217-235

平山輝男 (1957) 『日本語音調の研究』 明治書院

平山輝男 (1974) 「諸県方言の音調研究」 『音声学世界論集』 (井上史雄他編 1999 の『九州方言孝④』 pp. 341-334 に再収録) pp.252-259

平山輝男 (1975) 「薩隅・諸県方言」 『現代日本語の音声と方言 新・日本語講座3』 汐文社 pp.252-275

福井玲 (2001) 「韓国語のアクセント」 『音声研究』 第5巻第1号 pp.11-17

HUKUI rei (2003) 「Pitch Accent Systems in Korean」 『Proceeding of the Symposium CROSS-LINGUISTIC STUDIES OF TONAL PHENOMENA Historical Development, Phonetics of Tone, and Descriptive Studies』 pp.275-286